



Data

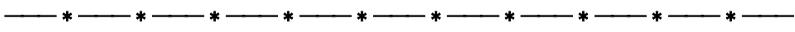
監督・製作・脚本: イ・チャンドン
 原作: 村上春樹『納屋を焼く』(新潮文庫)
 出演: ユ・アイン / スティーブン・ユアン / チョン・ジョンソ

👁️👁️ みどころ

イ・チャンドン監督は、キム・キドク、ポン・ジュノ、パク・チャヌク、ホン・サンスらと並ぶ韓国映画界の巨匠。その最新作は、村上春樹の原作『納屋を焼く』を大胆に脚色し、焼く対象も納屋からビニールハウスに変えてしまった本作。そのテーマは怒りだ。

ストーリーは最初から謎だらけ。男2人女1人の三角関係(?)に揺れる恋愛劇、青春劇のようだが、こりゃホントはミステリー! そう思うほど、ミステリアスだ。ハルキ文学特有の曖昧さを、イ・チャンドン監督が時代も舞台も大きく変え、3人の登場人物の骨格まで変えてしまったのだから、それも当然だろう。

あれも、これも答えが出ないままの展開に私はイライラだが、批評家の評判は上々。それは一体なぜ? 私は“衝撃の結末”にも少しイチャモンをつけたいが、さてあなたは?



■□ “司馬文学” は大好きだが、“春樹文学” は? ■□

私は、『竜馬がゆく』や『坂上の雲』をはじめとする司馬遼太郎の小説が大好き。故郷の松山に戻り、地元愛に浸りながら『坂上の雲』をむさぼるように読んだ大学1回生の夏休みのことを今でも鮮明に覚えている。その後も、『国盗り物語』『関ヶ原』『世に棲む日日』『花神』『翔ぶが如く』『項羽と劉邦』等々、その面白さは私にとって群を抜いていた。それに対して、私と同じ1949年生まれの作家、村上春樹文学は?

といっても、私は彼の小説をほとんど読んでいないから断片的な評価しかできないが、

良くも悪くも私の印象に強く残っているのが『ノルウェーの森』。それも、2010年に私が観た同名の映画との関連で春樹文学を考えたに過ぎないが、ハッキリ言ってその小説も私はあまり好きになれなかったし、映画『ノルウェーの森』も私にはたいした作品と思えず、星3つだった(『シネマ25』未掲載)。近時の春樹文学の大作である『騎士団長殺し』はそれなりに興味深く読んだが、やはり感銘を受けるレベルには、とてとても……。

■原作は春樹文学だが、大きく脚色！■

本作のパンフレットによれば、本作の原作は村上春樹の「螢・納屋を焼く・その他の短編」(新潮文庫)と書かれている。もっとも、イントロダクションでは「原作は世界的な人気作家である村上春樹。彼が1983年に発表した短編小説「納屋を焼く」を大胆に脚色。韓国の現代社会で浮遊する若者たちの姿と心理的な駆け引きをミステリータッチで鮮烈に描き出す。」と書いてある。

他方、2019年1月25日付産経新聞「文化シネマ」におけるイ・チャンドン監督のインタビューでは「村上春樹が昭和58年に発表した短編「納屋を焼く」を大胆に脚色し、舞台を現代の韓国に置き換えて、若い男女3人の人間模様を緊迫感あふれるサスペンスに織り上げた。」と紹介されている。また、同記事によると、イ・チャンドン監督はNHKから「村上原作の短編を1本選んで映画にする」という打診を受けたが、「最初は自分にはできそうにないとお断りした」ものの、女性脚本家のオ・ジョンミから「納屋を焼く」を題材にしてはどうかと提案されたことを受けて、2人で脚本に取り組み、「怒りを内包した映画に仕上げた」と書かれている。

さらに、本作は2時間28分の“完全版”だが、既にNHKでは50分短い、日本語吹き替え版が昨年12月に放送されているらしい。さあ、本作はどんな映画？

■イ・チャンドン監督の作品は名作ぞろい！しかし、■

私は、2004年に「シネ・ヌーヴォ」が開催した「中国映画の全貌2004」で合計31本の中国映画を一気に鑑賞して以来、中国映画の魅力にハマってしまったが、韓国映画もイ・チャンドン監督をはじめ、キム・ギドク監督、ポン・ジュノ監督、パク・チャヌク監督、ホン・サンス監督らの作品はいずれもずばらしく、大好き！

イ・チャンドン監督はクリント・イーストウッド監督のように多作ではなく、最新作は8年前の『ポエトリー アグネスの詩』(10年)、『シネマ28』235頁)だ。私は彼の出世作となった『ペパーミント・キャンディ』(00年)を観ていないが、第3作目の『オアシス』(02年)は「まさに、ホンモノの「演技力」ここにあり！ホンモノの韓国映画ここにあり！の極みだ。」と書き(『シネマ7』177頁)、第4作『シークレット・サンシャイン』(07年)は「韓国を代表するこの2人の演技派女優の熱演ぶりを、イ・チャンドン監督の3作目と4作目で見比べることができるのは、最高の贅沢……？」と書いて絶賛し(『シ

ネマ 19』66頁)、2つとも星5つをつけた。また、イ・チャンドン監督が制作、制作総指揮として関わり、監督を若いクォン・オグアンに委ねた『フィッシュマンの涙』(15年)も面白い映画だった(『シネマ 39』201頁)。しかし、本作は・・・?

イ・チャンドン監督の代表作である『オアシス』と『シークレット・サンシャイン』は国際的にも高い評価を受け、前者は第59回ベネチア国際映画祭銀獅子賞(最優秀監督賞)、後者は第60回カンヌ国際映画祭主演女優賞をはじめとするさまざまな賞を受賞している。本作も2017年の第61回カンヌ国際映画祭で国際批評家賞を受賞したが、そこで最高賞の金熊賞を受賞したのが是枝監督の『万引き家族』(18年)(『シネマ 42』10頁)だ。そんな事情のためか、本作のパンフレットのイントロダクションでは、まず最初に本作を次のとおり紹介している。「第71回カンヌ国際映画祭で批評家による得点が過去最高点をマーク。各国の有力ジャーナリスト10人による星取表で4.0満点中、平均点3.8という驚異のの評価を叩き出し、国際映画評論家連盟賞を受領。『万引き家族』のバルムドール受賞を最も脅かした作品とされる、噂の大傑作がついに全貌を現すー。」しかし、これはいかにも負け惜み的な書き方だ。点数はホントなのだろうが、『万引き家族』のバルムドール受賞を最も脅かした作品とされる」というのは、誰かさんの勝手な推測に過ぎない。また、バルムドール賞に次ぐ賞である「グランプリ」は、近々鑑賞予定のスパイク・リー監督の『ブラック・クラズマン』が受賞している。つまり、「本作は国際批評家賞の受賞に留まった」というのが真相なのでは・・・?

■□■テーマは“怒り”。なるほど! その描き方は? ■□■

昨今はフランスの「黄色いベスト」運動に見るように、フランスの若者の“怒り”が顕著だが、昨年10月に観た『乱世備忘 僕らの雨傘運動』(16年)では、香港の若者たちの“怒り”も顕著だった。これらは両者とも政治に対する“怒り”だが、韓国では経済的不平等に伴う“格差の広がり”に対する若者の“怒り”が顕著らしい。これは中国でも同じだし、日本でも韓国や中国の若者ほど激しく自己の“怒り”をアピールしないからわかりにくいものの、同様の“怒り”はふつふつと煮えたぎっているらしい。それを近時映画化したのが、李相日監督の『怒り』(16年)だ。そこでは、原作:吉田修一×監督・脚本:李相日『悪人』(10年)(『シネマ 25』210頁)のタグで、東京編、千葉編、沖縄編という3つの物語を交差させながら、渡辺謙、森山未來、松山ケンイチ、綾野剛、広瀬すず、宮崎あおい、妻夫木聡ら7人の豪華俳優陣が競い合う“怒り”の「演技合戦」の迫力がすごかった(『シネマ 38』62頁)。また、イタリア映画『いつだってやめられる 10人の怒れる教授たち』(17年)は、そのタイトル通り教授たちの“怒り”がスクリーンいっぱいこぼれていた(『シネマ 42』130頁)。

他方、2018年1月7日付読売新聞のインタビューでは「最初は「納屋を焼く」は、「怒り」と関係ない物語だと思った。が、本作にも参加する脚本家のオ・ジョンミさんがこう

言うのを聞いて視界が開けた。「謎の男は、納屋が『焼かれるのを待っているような気がする』から焼くと答える。でも仮にそれが物体ではなく、人、あるいは女性だったとしたら、（そう言われた側は）怒りを感じますよね。自分が役に立つか立たないかを勝手に判断されるわけですから」と書かれている。つまり、「激しい競争システムの中で、いつ役立たずと言われるか、恐れと怒りを感じている現代の若者の状況とのリンクを見いだした。」らしい。しかして、イ・チャンドン監督はその“怒り”を、本作でどう描くの？

ちなみに、原作の英題は『Barn Burning』で、米国の作家ウィリアム・フォークナーにも同名の短編があるらしい。フォークナーの小説は本作にも登場するが、両者の関連は私には不明だ。パンフレットにある佐々木敦（批評家）の「納屋からビニールハウスへ」と題するコラムでは、註の註として「村上春樹は「納屋を焼く」を書いた時はフォークナーの同名短編は未読だったと発言している。そのせいか初出と新潮文庫版「螢・納屋を焼く・その他の短編」には「僕」がフォークナーの短編集を読んでいる描写があるが、その部分が「週刊誌を三冊」に変更されているヴァージョンも存在する。」と書かれているのが興味深い。それに対して、前述した読売新聞の記事ではイ・チャンドン監督はフォークナーの同名の小説について、「村上さんの小説を読むずっと前に読んでいて、後から題名の一致に気づいたが、偶然とは思えなかった。同じ話を別の形式で書いているのではないかとも思った」と語っているから、それも興味深い。しかして、本作ではフォークナーの小説はいかなる形で登場するの？それに注目！

■□■原作の主人公は？本作の主人公は？その違いは？■□■

原作は『納屋を焼く』なのに、イ・チャンドン監督はなぜ本作のタイトルを『バーニング』とし、焼く対象も納屋からビニールハウスに変えたの？そんな興味を持った私は、前述した佐々木敦（批評家）のコラム「納屋からビニールハウスへ」は興味深かった。そこで、さっそく原作を購入して読んでみると、同コラムに書かれているとおり、原作の主人公は“僕”で名前は無い。また、舞台はもちろん日本だが、その時代は1980年。そして、この“僕”は限りなく原作者村上春樹本人に近い設定だから、1949年生まれの春樹が31歳の時。すなわち、1980年という時代になるらしい。ところが、映画ではさすがに抽象的な“僕”では主人公に似づらいこともあって、本作の主人公は兵役を経て大学を卒業した後、小説家を志しながらアルバイト生活をしている若者ジョンス（ユ・アイン）としているから、彼は25歳ぐらい・・・？また、本作にはスマホが頻繁に小道具として登場してくるとおり、時代は現代の韓国で、2017年だ。

他方、ジョンスの故郷はパジュ市のマヌリ。北朝鮮に接しているらしく、そこでは2017年の今でも北からの宣伝放送が毎日流されているからビックリ！しかも、都市問題をライフワークにしている私には、本作に登場するこのジョンスの故郷の田舎ぶりにもビックリだ。それはともかく、そこまで主人公の年齢や立場を原作から変えてしまえば、そも

そも本作は村上春樹の短編『納屋を焼く』を原作とした映画と言えるの？

そんな疑問があるうえ、スクリーン上ではジョンスは小説家になるための勉強をしている雰囲気は全くないかアレレ……。父親にまつわる“ある事情”で故郷に戻って牛の世話をしているジョンスの姿を見ていると、知的作業をしている雰囲気は全くない。数回だけパソコンに向かって何か書こう（打とう）としている姿が映し出されるが、資料を周りに広げることもなく小説が書けると思ったら大間違いだ。それは、毎日文章を書いている私の経験上からも明らかだし、小説執筆時には常に古本屋に通い、膨大な資料の中で格闘していた司馬遼太郎センセイの姿を見ても明らかだ。

■□■原作と本作で主人公が大違いなら、“彼”も大違い■□■

原作と本作では主人公である“僕”の年齢や立場が全然違っているが、それは原作に登場する“彼”も同じで、原作と本作では全く違っている。もっとも、高級マンションに1人で住み、ポルシェに乗り、ジョンスから「仕事は？」と聞かれると「遊ぶのが仕事。色々やってる」と答える男ベン（スティーブン・ユェン）の“羽振りの良さ”は原作とよく似ている。しかし、原作では“彼”の方が“僕”より少し年下だから、2人の男同士の会話の“主導権”が原作と本作では全く違っている。つまり、本作では1度だけベンがジョンスに対してヘミ（チョン・ジョンソ）を巡って、「ボクは君に嫉妬した。」と告白するものの、ストーリー全般を通して圧倒的にベンの方に余裕があり、焦っているのは一方的にジョンスの方になっている。

他方、「小説家を目指している」と言いながら、実際にはそのための努力が全く見えない主人公のジョンスと同じように、これだけの大金持ちのベンもその生活の実態は全くわからない。マンションの中はいつもキレイに整理整頓されているが、お手伝いさんがいる様子はないし、料理は好きだと言っているが、食材はもちろん汚れた食器やゴミの類は全く見えない。また、ジョンスが使わせてもらったトイレの中には飾り棚があり、その引き出しの中には装飾品が整然と入っているから恐れ入る。この男は、この豪華なマンションの中で一体どんな一人暮らしの生活をしているの？ジョンスはベンのことを「ギャツビーだ」と呟き、「どういうわけか金持ちで、謎に包まれた若者たち。韓国にはギャツビーが多い」と語っていたが、それってホント？また、「あなたの趣味は何ですか？」という質問はよくある質問だが、その答えとして「ビニールハウスを焼くこと」と答える男はベン1人だけだろう。彼は、なぜそんな趣味を？そして、なぜ2ヶ月に1回のペースでそんな趣味を実行しているの？私にはサッパリ……。？

■□■整形美女の魅力度は？メタファーぶりは？■□■

韓国には整形美女が多く、プチ整形を何度も繰り返している女性が多いらしい。そのためか、本作冒頭、キャンペーン・ガールとして、怪しげな店で、怪しげな服装で、怪しげ

な踊りを踊っていた若い女性から「ジョンズ！」と声をかけられるまで、ジョンズはこの女性が幼なじみのヘミだということがわからなかったらしい。休憩時間に一緒にお茶を飲み、仕事を終えてからまた一緒にお酒を飲むことによって、2人は互いのことを語り合ったようだが、よく聞いていると、2人の会話をリードするのはもっぱらヘミ。ヘミが習っているというパントマイムの話、アフリカ旅行に行きたいという話、リトルハンガーとグレートハンガーという2つの“飢えた者”の話等々、会話はヘミからの一方通行ばかりだ。そして、ヘミがアフリカ旅行で留守の間、自宅（アパート？）にいる猫の世話をしてくれと頼まれ、ジョンズがそれを引き受けることから2人の“交際”が始まるが、そもそもこの猫の姿が一切見えないのが気がかりだ。

他方、やっとアフリカから帰って来ると連絡があり空港に迎えに行くと、何とそこには一緒に帰ってきたという男ベンがいたから、さぞかしジョンズはビックリしたことだろう。ところが、ヘミは2人の男を手玉に取っているとは全く思っていないかのように、帰国当日の“ホルモン鍋”を3人で楽しんだかと思うと、その後も再三3人で出会う場をセットすることに……。男女三人の“三角関係”はよくあることだが、本作のジョンズとベンとヘミのようにお互いの立場や感情について互いに全く触れないまま、表面ズラだけで過ごす関係は珍しいはずだ。しかし、わざわざ38号線の近くにあるジョンズの故郷まで2人がベンのポルシェでやって来たのは、一体なぜ？ヘミは「近くに来たから」と説明していたが、それが真っ赤なウソであることはミエミエだ。

また、そこではベンが勧めるまま3人で大麻を吸った挙句、なぜかヘミは男2人の目の前で服を脱いで裸で踊り始めることになるから、ビックリ。これは、某キャバクラでキャバ嬢から勧められるままヘミがアフリカのサン族の踊りを披露したのとは全く意味が違うはずだ。ヘミの踊りそのものは確かに魅力的だが、本作がデビュー作になったこの整形美女ヘミを演じる女優ジョン・ジョンソンの魅力度は如何に？また、そのメタファーぶりをどう考える？

■□■ネタバレ厳禁！この結末を如何に考える？■□■

映画には、わかりやすい映画とわかりにくい映画の2種類がある。また、映画には答えを見せる映画と答えを見せない映画の2種類がある。しかし、本作は“わかりにくい映画”かつ“答えを見せない映画”の典型だ。

本作中盤、せつかく観客はヘミの素っ裸で踊る姿を拝ませてもらえたのに、その後はベン・アフレックとロザムンド・パイクが共演した名作『ゴーン・ガール』（14年）のように（『シネマ35』159頁）、突如スクリーン上から消えてしまうので、アレレ……。これは、一体なぜ？また、ヘミの留守中、ヘミのアパートまで通って世話をしてやった猫の姿をジョンズは結局見ないままだったが、なぜそれと同じ名前の猫をベンが飼っているの？さらに、ジョンズは実家の近くのビニールハウスが焼かれているかどうかをくまなく調べ

た挙句、どこも焼かれていないことを確認したのに、それをベンに聞くと、なぜベンはいつも簡単に「もう焼いたよ」と答えたの？

その他、導入部から次々と提示される疑問点は、本作の途中でもラストでも何も解明されないから、私はついイライラ状態に……。そして、それはジョンスも同じだったようで、ラストに向けてのジョンスのイライラぶりもかなりひどくなってくる。その結果、本作ラストでジョンスが見せる、あつと驚く行動とは……。？それを書くと、ネタバレ厳禁！と怒られること必至だから、それはあなた自身の目でしっかりと確認してもらいたい。しかして、この“衝撃の結末”をあなたはどうか解釈し、如何に評価？

2019（平成31）年2月15日記